

直前東大世界史発展演習

【3 回目】



問題

第 1 問

解答

マラッカは、中国とインドを繋ぐ海路の中間地点に位置し、東南アジアの香辛料などを扱う貿易港として発展していた。インドでイスラーム化が進んでいた影響も受け、14世紀後半に建国され、その後、東南アジア初の本格的イスラーム教国となったマラッカ王国には、当時南海遠征を行っていた明の鄭和も頻繁に立ち寄っており、マラッカ王国は明の冊封体制下に入った。当初はマレー半島北部からタイのアユタヤ朝の圧力を受けていたが、こうした国際関係を利用して外圧もおさえ商業国家として繁栄した。しかし、大航海時代に突入すると、インドへ到達していたポルトガルは、さらに香辛料貿易を独占しようとして東南アジア進出を図り、1511年にはマラッカ王国を滅亡させマラッカを支配下に置いた。17世紀に入ると、新たに台頭してきたイギリス・オランダが、東インド会社を設けて重商主義政策のもと東南アジアへ進出した。1623年のアンボイナ事件でイギリスを東南アジアから駆逐したオランダは、さらにポルトガル勢力を駆逐してマラッカも占領した。それ以降オランダは東南アジア一帯へ支配を拡大すると並行して、香辛料貿易の独占を進めた。香辛料貿易の重要性は18世紀に入り薄れたものの、今度はイギリスが対中国貿易の中継地点として18世紀後半から東南アジアへの再進出を図る。19世紀に入り、イギリスはシンガポール、マラッカを獲得し、以前獲得したペナンと合わせて海峡植民地を形成した。(599字)

解説

なるべく思考力を働かせる問題にチャレンジしてもらおうというのが作問の意図である。未知の問題に対して思考力・論理力でどこまで挑むことができるのか、といった所を最後まで追及してほしい。

まず、さすがにマラッカ王国を知らないとは勝負にならないが、その後は問題文にある通り、「この都市の歴史は東アジア・インド・ヨーロッパなどの諸地域との接触の歴史であり、マラッカをめぐる諸勢力の興亡の歴史であった」という誘導と指定用語の誘導に従って、論理的な考察を進めていければよい。問題文の指示より、「14世紀後半から19世紀前半までにかけてのマラッカの歴史について述べなさい」とある。以下はこの期間の説明を4つの時期に分けて進めていきたい。

① 14世紀後半～16世紀前半 マラッカ王国の時代

指定用語に「鄭和」という語がある。鄭和を派遣した皇帝である永楽帝が、14世紀から15世紀の変わり目にかけて靖難の役で権力を握ったことを知っていれば、建国初期のマラッカ王国になんらかの接触があったと考えるのが自然である。鄭和が南海遠征を行ったことで、多くの国が明と冊封関係を結んだことは理解しているだろう。マラッカ王国も、鄭和の南海遠征のなかで冊封体制に組み込まれた国の一つであった。(そうでなければ、マレー半島の一都市であるマラッカが、明の威光なしに独力で様々な外圧に抵抗できるとは考えにくい。) こうした国際環境が、商業都市マラッカの繁栄を生んだのである。

指定用語の「アユタヤ朝」がやっかいであるが、少々意地悪をして加えてみた。本番で全指定用語が十分に使いこなせるとは限らない。そういう状況を前にした時の切り抜け方をここで経験しておくのも必要であろう、と思ったからである。この「アユタヤ朝」という指定用語をマラッカとの関連で述べるためには、ちょうど数行前の解説で述べた「鄭和の南海遠征のなかで冊封体制に組み込まれた」「明の威光なしに独力で様々な外圧に抵抗できるとは考えにくい」といった事柄の考察が必要である。マラッカ王国が建国当初に受けていた外圧の1つがアユタヤ朝であった、ということにたどり着いてくれることが望ましい。

また、マラッカ王国が「東南アジア初の本格的イスラーム王国」ということは知っているだろうが、その背景を考察しただろうか。既に唐代からイスラーム商人が海路で中国を訪れており、このことだけでは根拠にならない。この背景としては、インド自体のイスラーム化ということさらには指摘すべきである。(ちなみにこの問題とは無関係だが、東南アジアに伝わったイスラーム教はスーフィズムに属する。)

② 16世紀前半～17世紀前半 ポルトガル支配の時代

大航海時代に突入したヨーロッパ諸国の中で、インド西岸のカリカットにたどり着いていたポルトガルは、その北方のゴアに拠点を設けた。もちろんこれは、香辛料貿易の利権を独占するための第一歩であり、さらにポルトガルは東南アジアへの進出を図ったのである。1511年にはゴアの総督であるアルブケルケの攻撃により、マラッカ王国は滅ぼされてポルトガルの支配下に置かれることになる。なお、解答例では「香辛料貿易を独占した。」と断言することは回避した。ポルトガルは、東南アジアのマラッカ・インドのゴア・ペルシア湾のホルムズ島を制圧し、香辛料貿易を完全に独占しようと試みたのだが、それが完全にうまくいったわけではない。一例としては、(もちろんこんな事は述べなくてもよいのだが)北西インドの商人などは、ポルトガルの独占貿易を嫌ってスマトラ島北部のアチェを寄港地としたスマトラ島西岸経由のルートを用いている。

③ 17世紀前半～19世紀前半 オランダ支配の時代

1600年にはイギリスで、1602年にはオランダで東インド会社が設立された。17世紀にはこの2国が東南アジアの香辛料貿易の利権独占をめぐって激しく争うことになる。「アンボイナ事件」は、もちろん1623年にモルッカ諸島で香辛料貿易の利権をめぐってオランダとイギリスが衝突した事件であり、この争いに勝利したオランダは、以降東南アジアへの進出を強める。オランダは1641年にはマラッカも占領しており、オランダがこうしてマラッカに進出したという点が指摘できていればよい。オランダは一時は東南アジアの香辛料貿易をほぼ独占することに成功する。とはいえ、ポルトガルの進出以来、ずっと香辛料貿易で話をひっぱってきたが、いつまでも香辛料が貿易のヒット商品になるわけでもない。17世紀後半にはオランダで香辛料価格の大暴落といった事態も発生しており、徐々に香辛料という商品の貿易上の旨味は徐々になくなっていくのだ。のちには産業革命の進展とともに、様々な工業製品が貿易の主力となりさらに香辛料貿易の重要性はさらに低下する。

④ 19世紀前半（～第2次世界大戦） イギリス支配の時代

イギリスは、18世紀後半にフランスを倒してヨーロッパ諸国家の頂点に立ったのち、当時国内で産業革命が始まっていたこともあり、インド・中国への市場拡大を図るようになる。イギリスは、中国貿易のための中継地点を東南アジアに求めたのであり、1786年にペナン島を獲得したのを皮切りに、19世紀に入るとシンガポール、そしてマラッカを支配下に置く。これらは海峡植民地としてまとめられていく、という所までを述べてくれれば、これで解答となる。ちなみに、フランス革命の際に一時的にイギリスがマラッカを支配しており、もちろんこのことを言及してもよい。

東大世界史に付け焼き刃は通用しない。とりわけ、第1問で要求されるのは、歴史を論理的体系として理解できているかと、その体系的理解にしっかりと知識が上乘せられているかである。前者に関してはもはやどうしようもない。いままでの学習態度が問われているからだ。しかし、後者に関してはいくらでもまだ努力の余地は残されている。もちろん単に知識を事実羅列的に覚えるだけでは無意味であるということは大前提だが、最後に勝負を分けるのは、正確な推理、論理展開を支える知識量である。最後の一秒までがんばっていこう。

【配点の目安】（配点 32点）

- ① マラッカは14世紀後半（14世紀末）に成立した…2点
- ② マラッカは東南アジア初の本格的イスラーム教国である…2点
- ③ 鄭和は南海遠征の際、マラッカに立ち寄った…3点
- ④ マラッカは明の冊封体制下に入った（明の庇護を受けた）…2点
- ⑤ マラッカは当時タイのアユタヤ朝の圧迫を受けていた…2点
- ⑥ ポルトガルが香辛料貿易のために東南アジアに進出した…3点
- ⑦ 1511年にマラッカ王国はポルトガルに滅ぼされた…3点
- ⑧ その後、オランダ・イギリスが東南アジアに進出し、アンボイナ事件が起こった…3点
- ⑨ オランダはマラッカを占領した…3点
- ⑩ オランダは香辛料貿易を独占した…3点
- ⑪ イギリスが東南アジア再進出を図った…3点
- ⑫ イギリスはシンガポール・マラッカなどを獲得し、海峡植民地を形成した…3点

第 2 問

解答

- 問(1) (a) 土地私有の抑止と税収の確保を目的として農民に土地を給付したが、妻・奴婢・耕牛も給田の対象としたため、豪族に有利であった。(60 字)
- (b) 契丹の建てた遼は、契丹文字を作成して固有の民族文化の保持に努めるとともに、遊牧民は北面官の下で部族制を維持し、農耕民には南面官を設置して州県制で統治する二重統治体制を採用した。(88 字)
- 問(2) ピューリタン革命の末に共和政を樹立したクロムウェルは、住民の大多数がカトリック教徒で王政擁護の立場を採るアイルランドに遠征軍を派遣し、同地を征服した。多くのアイルランド人は土地を収奪され、イギリス人不在地主の下で小作人の地位に転落した。(118 字)
- 問(3) (a) 第 4 回十字軍はヴェネツィア商人が主導し、商業圏拡大のためにコンスタンティノープルを陥落させてラテン帝国を建国した。(57 字)
- (b) ルーマニア・セルビア・モンテネグロの独立が承認され、ブルガリアはオスマン帝国内の自治国となった。オーストリアがボスニア・ヘルツェゴヴィナの統治権を獲得し、ロシアの勢力は抑えられた。(90 字)

解説

世界史上の支配・被支配の歴史をテーマとして出題した。こうしたテーマは第 1 問の大論述でも頻出である。政治的な動き（どの時代に、どの勢力が、どの地域・国家を、何を契機として支配に至ったか）はもちろんのこと、支配者の変遷が与える経済的・社会的・文化的影響についても目を配りながら学習し、第 1 問・第 2 問・第 3 問のいずれの形式で出題されても解答できるように準備しておこう。

問(1) (a) 386 年、鮮卑系拓跋氏の拓跋珪（道武帝；位 386 ～ 409）は平城（現在の大同）を首都に北魏を建国し、439 年、第 3 代の太武帝（位 423 ～ 52）が華北を統一して五胡十六国の騒乱を終わらせた。その後、第 6 代皇帝に即位した孝文帝（位 471 ～ 99）は、国家が農民に年齢に応じて土地を配分する制度である均田制や、村落制度である三長制を実施して、農業生産を経済的基盤とする国家体制を整備した。

均田制は国が一定の基準で農民に土地を給付することで自作農を創出し、税収を確保することを目的とした。また、国家が土地を管理することで、豪族・貴族など有力者による大土地所有を抑止するという意図もあった。北魏・隋・唐で行われた均田制についてまとめると、次のようになる。

▼北魏

＜露田＞	＜桑田＞	＜麻田＞
男 40 畝	男 20 畝	男 10 畝
女 20 畝	女 -	女 5 畝

※奴婢に良民と同等に給田。耕牛にも給田（4 頭限度）。

▼隋

＜露田＞ ＜永業田＞

男 80 畝 男 20 畝

女 40 畝 女 -

※婢・耕牛に給田なし。身分・官職に応じて永業田・職分田あり。

▼唐

＜口分田＞ ＜永業田＞

男 80 畝 男 20 畝

老男 40 畝 女 -

※妻・奴婢・耕牛に給田なし。官人永業田あり。寡婦には給田。

解答に際しては、均田制の目的としてまず先述の「税収の確保」を挙げたい。関連事項として「大土地所有の抑止」や「自作農の創出」に触れてもよいだろう。もう1つの要求である「北魏の均田制を後世の均田制と比較した際の特徴」であるが、上の表の中から、隋・唐の均田制と比べて最大の相違点である給田対象（奴婢・耕牛にまで給田されたこと）を述べればよい。その結果、奴婢や耕牛を多く所有している豪族にとって有利なものとなったことも、制限字数に余裕があれば盛り込んでおくこと。

なお、均田制が崩壊した後に、税収を確保する手段として改革された税制が兩税法である。唐代の土地制度・税制・軍制とその変化について、本問の復習も含めて改めて確認しておこう。

- (b) 契丹はシラ＝ムレン川流域を本拠とするモンゴル系遊牧民族で、916年に耶律阿保機の下で部族統一をなし遂げて建国した。926年には東方の渤海国を滅ぼして中国東北地方を支配下に収め、36年、華北での後晋の建国を援助して、その代償に燕雲十六州を獲得した。燕雲十六州は現在の北京・大同を中心とする地域で、契丹はこれらの農耕地帯をも支配下に置くこととなったが、首都は内モンゴリアの草原地帯に位置する上京臨潢府に置かれた。947年には国号を遼と改めた（983～1066年の間は再び契丹と称した）。

遼は契丹文字を作成して固有の文化を維持する政策を採るとともに、契丹人など遊牧民に対しては北面官の下で民族固有の部族制による支配を行い、農耕民の漢人・渤海人などに対してはこれとは別に南面官を設置して州県制に基づいて治める二重統治体制を採用した。遼以後の金・元・清といった中国の異民族王朝は、それ以前の北魏とは異なり、自らの社会組織や文化を保持するための方策を採ろうとした点に特色がある。解答に際しても、この点を重視してまとめていくとよいだろう。

- 問(2) 16世紀、イギリス国教会を設立して宗教改革を実施したテューダー朝は、国教会制度をアイルランドにも導入しようとしたが、カトリックの信者が多くを占めていたアイルランドの抵抗は大きく、イングランドへの反乱が頻発した。17世紀半ばにピューリタン革命が起こり、1649年、イギリス議会の支配権を掌握した独立派の指導者クロムウェルが、国王チャールズ1世（位1625～49）を処刑して共和政を樹立した。アイルランドは国外に亡命中のチャールズ2世を国王として承認、これに対して同年、クロムウェルは王党派の根絶を目的にアイルランド遠征を行い、これを軍事征服した。征服が完了すると、反乱に加担した者から、その程度に応じて土地を没収することが定められた。この結果、多くのアイルラン

ド人の土地は没収され、イングランドに居住する不在地主がアイルランドの土地所有者となった。アイルランド人の多くは小作人に転落し、収穫物の3分の2は地主の取り分というきわめて厳しい条件の下で働くことを余儀なくされた。

解答に際しては、アイルランド征服を行ったクロムウェルの名と、アイルランドとイギリスの宗教的相違についてまずは言及したい。さらに、問題文の「革命期」という記述から、共和政が樹立されたイギリスと、王政を擁護するアイルランドという対立関係についても述べることで、アイルランドがイギリスに征服された要因を明らかにする。制限字数が比較的長めなので、アイルランドの住民が小作人となり収奪に苦しんだことなど、植民地化の詳細についても触れておくにより充実した解答になるだろう。

問(3) (a) 1096～99年に行われた第1回十字軍では、目的であった聖地奪回を果たしてイエルサレム王国を建国した。しかし、その後の第2回十字軍は失敗に終わり、12世紀後半にはアイユーブ朝のサラディンにイエルサレムを奪われ、第3回十字軍でも聖地奪回は果たせなかった。1202～04年にインノケンティウス3世の提唱で行われた第4回十字軍では、宗教的目的は薄れ、十字軍での海上輸送を担当していたヴェネツィアが主導権を握り、商業圏拡大のために商敵であるコンスタンティノープルを攻撃して占領し、ラテン帝国が建国された。その後もフランスのルイ9世（位1226～70）を中心に数度にわたり十字軍が行われたが戦果は上がらず、1291年に最後の拠点アッコが陥落して、失敗に終わった。

解答に際しては、「1202～04年の十字軍」が第4回十字軍であることを示し、キリスト教国の君主による聖地奪回のための十字軍ではなく、交易を担う都市が商業圏拡大のために起こした軍事行動であったという特徴的な点を中心にまとめるとよい。また、十字軍の影響、とりわけ教皇権の動揺および王権の伸長と東西交流による文化の発展については世界史の頻出テーマなので、関連事項を復習しておいてほしい。

(b) 19世紀前半以降、オスマン帝国領内の諸民族が自立化の動きを強めると、ロシアを初めとするヨーロッパ諸国はこれに介入し、バルカン半島での勢力拡大をはかった。ロシアは不凍港と地中海への出口を求めて、エジプト＝トルコ戦争やクリミア戦争に際して南下政策を行ったが、イギリスなどの干渉によって2度とも失敗した。

1870年代頃から、ロシアはパン＝スラヴ主義を掲げてオスマン帝国領内のスラヴ諸民族への影響力を強め、南下政策を再開した。1875年にボスニア＝ヘルツェゴビナで反乱が勃発すると、ロシアはスラヴ民族の保護を口実にオスマン帝国に宣戦した（ロシア＝トルコ戦争；1877～78）。戦争に勝利したロシアはサン＝ステファノ条約を結び、ルーマニア・セルビア・モンテネグロの独立、ブルガリアの自治を承認させた。ロシアはブルガリアを通じてバルカン半島を支配下に置くことに成功したかに見えたが、この条約の内容にイギリスとオーストリアが反発し、ドイツのビスマルクが1878年にベルリン会議を開いて、利害の調整を行った。

その結果、1878年に結ばれたベルリン条約では、ルーマニア・セルビア・モンテネグロの独立が承認され、ブルガリアは領土を縮小した上でオスマン帝国内の自治国となった。イギリスはキプロス島を、オーストリアはボスニア＝ヘルツェヴィナの統治権を獲得した。これにより、ロシアの南下政策は3度失敗に終わった。

解答に際しては、制限字数が比較的短いので、ベルリン条約締結に至るまでの経緯を長々

と述べている余裕はない。「バルカン半島諸国の動向」という問題文の要求に沿って、ベルリン条約の内容の中で、バルカン半島の領土について定められた内容を挙げつつ、ロシアがバルカン半島から撤退していったことも併せて述べるとよい。

【配点の目安】（配点 38 点）

問(1) (a) (6 点)

- ① (均田制の目的) 土地私有の抑止と税収の確保… 2 点
- ② (北魏の均田制の特徴) 妻・奴婢・耕牛にも土地を給付した… 2 点
- ③ (北魏の均田制の特徴) ②のために豪族に有利であった… 2 点

問(1) (b) (8 点)

- ① 契丹は契丹文字を作成するなど固有の民族文化の保持に努めた… 2 点
- ② 契丹は二重統治体制を採用した… 2 点
- ③ 遊牧民には部族制をとった… 2 点
- ④ 農民には州県制で統治した… 2 点

問(2) (10 点)

- ① ピューリタン革命によって共和政を樹立したクロムウェルがアイルランドに遠征軍を派遣した… 4 点
- ② アイルランドはカトリック教徒が多く、王政を擁護していた… 3 点
- ③ アイルランド人は土地を奪われ、小作人の地位に転落した… 3 点

問(3) (a) (6 点)

- ① 第 4 回十字軍はヴェネツィア商人が主導した… 2 点
- ② 商圏拡大のためにコンスタンティノープルを陥落させた… 2 点
- ③ ラテン帝国を建国した… 2 点

問(3) (b) (8 点)

- ① ルーマニア・セルビア・モンテネグロが独立した… 2 点
- ② ブルガリアはオスマン帝国内の自治国となった… 2 点
- ③ オーストリアがボスニア・ヘルツェゴヴィナの統治権を獲得した… 2 点
- ④ ロシアの勢力は抑えられた… 2 点

第 3 問

解答

問(1) 露仏同盟によるフランス資本の導入

問(2) 戦車, 毒ガス, 潜水艦から二つ

問(3) (第1回) 万国博覧会

問(4) (a) 坤輿万国全図 (b) マテオ=リッチ

問(5) フン人, アヴァール人, マジャール人, ブルガール人などから二つ

問(6) 七月革命

問(7) 季節風 (モンスーン)

問(8) (a) スエズ運河 (b) レセップス

問(9) (a) キリスト教 (b) テオドシウス帝

問(10) フォード社

解説

交通・情報通信の発達を主テーマとして出題した。第3問も含めて、経済・社会構造の変化をもたらした技術の革新は、東大では頻出のものである。大論述のテーマにもなることが多いので、ここで出題されたものに留まらず、他分野の技術革新・学問の発達についてもしっかり確認しておいてほしい。

問(1) 鉄道については、交通革命の中心であり、物資の流通を円滑にしたということに目が向きがちであるが、帝国主義時代においては、自国内の統合の強化や植民地支配にも利用されており、その果たした役割は多岐にわたっている。論述のテーマとしても重要であり(2003年度の第1問で出題されている)、各自使用している教科書で、鉄道に関する部分をしっかり確認しておいてほしい。ここでは、シベリア鉄道の建設について問うている。ロシアは19世紀後半の農奴解放令後、フランスなどの資本と技術の導入により、徐々に産業革命が進展した。1890年代には蔵相ウィッテの下で重工業が急速に発展し、1891～94年に成立した露仏同盟はフランスからの投資をさらに促進した。

問(2) 西部戦線・東部戦線ともに塹壕戦を主体とした持久戦となった第一次世界大戦では、各国が戦局を打開するため、国内の生産力と技術を総動員して、新兵器の開発を行った。このこともまた、この戦争が総力戦であったことの象徴と言えよう。最終的に飛行機以外にも、イギリスが開発した戦車(ソムムの戦いで初使用)、ドイツが開発した毒ガス(イープリの戦いで初使用)・潜水艦などが戦場に登場することとなった。第一次世界大戦で導入されたこれらの新兵器の開発において蓄積された科学技術が戦後の産業・軍備の増強に活かされるようになったことにも注意してほしい。

問(3) 19世紀中頃のイギリスの繁栄の象徴ともいえるものが万国博覧会である。“世界の工場”としての技術力を内外に示し、国威の高揚をはかることが開催の目的であった。第1回万国博覧会は、ロンドン市内のハイドパークで1851年5月1日より10月15日まで開催され、会場となった水晶宮(クリスタルパレス)は壮麗な建物として人気を博した。第2回は1855年パリで開催された。

- 問(4) 明末清初に来航したイエズス会士がもたらしたヨーロッパ文化については、文化の東西交流の例としてしっかり把握しておいて欲しい。マテオ＝リッチだけでなく、アダム＝シャル（シャル＝フォン＝ベル）以下カスティリオーネまで、どのようなものを中国にもたらし、何をヨーロッパに伝えたかをしっかり復習しよう。マテオ＝リッチ（1552～1610）は、中国布教に取り組み、徐光啓の助力を得て明朝宮廷において活躍した。中国にヨーロッパの最新技術を伝えると共に、ヨーロッパに中国文化を紹介し、東西文化の架け橋となった。主な業績としては、ここに挙げた「坤輿万国全図」の作製、キリスト教の教義を説いた『天主実義』、ユークリッド幾何学を紹介した『幾何原本』の刊行などが挙げられる。
- 問(5) ヨーロッパへ侵入した遊牧騎馬民族については以下の4つが重要である。4世紀に南ロシアから東ヨーロッパに侵入を開始したフン人は、ゲルマン人の大移動を引き起こしたものとして有名である。族長アッティラに率いられてヨーロッパを劫略したが、西ローマとゲルマン人の連合軍にカタラウヌムで敗れ、その後離散した。6世紀頃から中央ヨーロッパへ進出したモンゴル系のアヴァール人は、7世紀にビザンツ帝国に大敗し、8世紀末にはフランク王国のカール大帝に敗れ、衰退した。ブルガール人は、バルカン東南部に移住し、7世紀末にはビザンツ皇帝に建国を認められた。のちにスラブ人と同化し、ブルガリア人の祖となった。ウラル語系のマジャール人は、5世紀頃にウラル山脈西南麓から西進を始め、9世紀末にパンノニアに建国して更なる西進をはかったが、ドイツのハインリヒ1世およびオットー1世の討伐を受けた。このことはのちの神聖ローマ帝国成立の契機ともなり、同世紀に西ヨーロッパへ大規模な移住を行ったノルマン人やイスラーム教徒とともに、中世の封建制度の完成に影響を与えたともいわれる。
- 問(6) ナポレオンが失脚した後に成立したブルボン復古王朝では、ルイ18世に続いてシャルル10世が即位したが、絶対王政への復帰をめざそうとしたことに対して1830年、七月革命が発生した。この革命後に成立したルイ＝フィリップの七月王政下で産業革命が進展、台頭した産業資本家や労働者を中心に選挙法改正運動が高揚し、1848年に二月革命が発生した。
- 問(7) ローマ帝国管理下で紅海・インド洋を用いた交易が栄えたのは、季節風（モンスーン）を利用した航法が広まったことが原因である。ローマ帝国の金貨がインド南端やカンボジアの扶南で発見されていることや、後漢末に大秦王安敦の使者と称する者が日南郡に来航していることから、広範囲にわたる東西交易が行われたことを把握しよう。
- 問(8) スエズ運河建設は地中海と紅海の高低差があるために非常に困難を極めた。アフリカ地域でいち早く近代化政策を採ったエジプトであったが、スエズ運河開設の経費は重く、第2次エジプト＝トルコ戦争後にイギリスによる経済進出が続いていたこともあって財政が破綻してしまった。そのため、1875年に運河会社の株をイギリスへ売却することになり、イギリスはエジプトへの介入を強めた。このことがのちに、エジプトが保護国化されることにつながるのである。また、のちにレセップスは、スエズ運河建設の成功をもとにパナマ運河の着工にも乗り出していく。
- 問(9) これは、視点を変えれば簡単に正解に気がつく問題ではないだろうか。アッピア街道などが軍道として使用された、という固定観念にとらわれることなく柔軟に考えて欲しい。なお、キリスト教がローマ帝国に広がった背景には、『聖書』が当時の東地中海世界の共通語であるギリシア語（コイネー）で書かれていたことも挙げられる。

問(10) フォード社は流れ作業方式を導入し、大衆車 T 型フォードの大量生産化・低価格化に成功した。第 2 次産業革命については、これが背景となって帝国主義的侵略が行われていったということもあり、大論述のテーマになることも多い。その内容や第 1 次産業革命との相違、さらには独占資本主義の発展との関係にも注目しておいてほしい。

【配点の目安】（配点 30 点）

問(1)(3)(6)(7)(10)…各 2 点

問(2)(4)(5)(8)(9)…各 4 点（枝間は各 2 点）



会員番号	
------	--

氏 名	
-----	--